

二六、光榮に浴す

此の王事位、高貴の方々の御視察を仰いだことは、恐らく例がないかと思ひます。しかも、それがいつも、表だつたものでなく、御微行であるだけに、一層光榮深く思ふのであります。

秩父宮殿下には、大正十一年秋と昭和二年夏とに前後二回三島口を御視察あらせられました。演習が富士山麓で行はれた際に、二度とも突然御見えになつたのであります。色々御熱心な御質問に、説明を申上げる吾々をいたく啓發して下さいました。中止説の流布された頃でした。工事を御覽になつて、これ迄やつて完成させないのは惜しいとも仰せられ、どんなにか吾々の決心を引きしめて下さいました。いつも突然の御成りで、何等の準備も出来ず、普通の參觀者と同じ様に、有り合はせの合羽と靴帽子に身ごしらへせられて、瀧とほとばしる湧水の中を、何等の御屈托もなく御視察下さつたことは、誠に恐懼に堪へない次第であります。

高松宮殿下も、大正十三年の秋と、近く本年の九月に御視察あらせられました。最初の時は長岡温泉に御病後の御静養に御滞在の際であつたと存じますが、御附武官と御二人で自轉車にて突然三島口の詰所に見えられました。自轉車は大竹部落の産婆の家に一寸あづけたのであります。その婆さんも御歸りに御立寄り後、初めて夫れと知つたさうであります。第二回目の時は、妃殿下と御同伴にて箱根からの途次熱海口に御立寄りになつたのであります。妃殿下にも和装の儘にて電車の通ふ處迄御入坑下され、又殿下には貫通點から奥迄隔なく御覽下さいまし



東西通じて兩口工事主任の握手



熱海口従事員の歡喜

た。こんなに骨折つて作つても、出来上つてしまへば、何もわからずに、皆が香氣に通るのだなと御述懐あらせられたのには、御同情の深きにいたく感激致しました。

熱海に御別邸をもたれた久邇宮殿下には、王子、王女殿下と御一所に度々熱海口坑内に御入りになりました。山階宮萩麿王、藤麿王兩殿下にも御視察にられました。